

音楽の散歩道 **その10の8**

— ベートーヴェンの「第9」200年記念 —

悲しみと苦悩に満ちた真実のショパン, ショパンを見守るサンドとリスト(2)

鹿児島市	粟 博志
東区・荒田支部	粟 隆志
大海クリニック・大海宮崎クリニック	大西 浩之・海江田 寛
加治木温泉病院	夏越 祥次

(つづき)

図141は、リストの少年期の姿である(1823年頃, 12歳)。



図141 12歳のリスト少年

リストは少年期よりウィーン, パリ, ロンドンで非常に高名であり, 国際感覚も身に付けていたので, 生涯を通じ多数の肖像画が残されている。

この少年期の姿は, リストの素直さと聡明さを, よく描き出している。

図142は, リストが弟子のヴァレリー・ボワシエのアルペジオ演奏技術の練習用に書き与えた手稿(1832年, パリ)である。

当時は多くの女性が, 教養として文学, ピアノを学んでいた。

ヴァレリーは, 後にガスパラン伯爵夫人と

なる。

ショパンが晩年に多大な経済的援助を受けたのが, このような女性アマチュア・ピアニストのジェイン・スターリングである。



図142 上: 21歳のリストが女性の弟子に与えた, アルペジオの練習曲の手稿
下: 弟子の20年後, ガスパラン伯爵夫人

日本の音楽家は, ほとんど知らないだろうが, リストは後年, 演奏会用練習曲とは別に, 全12巻(通常の楽譜で467頁にも及ぶ)の

P演奏技巧用練習曲（ハノン教則本を超高度にしたような練習曲と考えてよい）を遺した。ともかく難曲ばかりである。

図143は、「Akkordsprünge und gebrochene Akkorde, 和音跳躍と分散和音」の練習曲の一部である。



図143 リストのピアノ演奏技巧練習曲「和音跳躍と分散和音」の練習曲

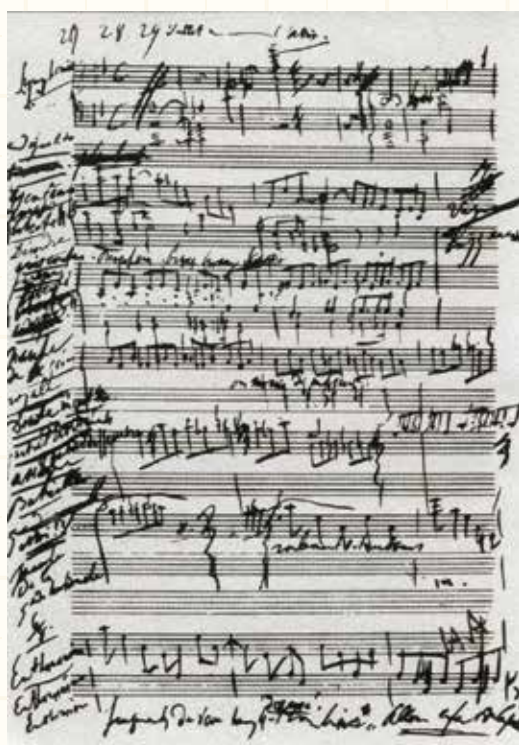


図144 「革命交響曲(未完)」の冒頭部分のスケッチ
運筆に迷いは無い

図144は、1830年の7月革命に際しての、リストの「革命交響曲」(冒頭部分のみで未完)のスケッチである。若いリストの運筆に、一瞬のためらいも認められない。

いずれも、リストの演奏能力、作曲能力の高さを示している。

1845年には、ベートーヴェンの生地ボンで、ベートーヴェンの生誕75周年を記念して、ベートーヴェンの銅像除幕式および記念演奏会が、プロイセン国王、フリードリヒ・ウィルヘルムIV世夫妻、英国のヴィクトリア女王夫妻の臨席の元に挙行されたが、リストは像の製作費用の寄付と、3,000人収容の大演奏会場の建設費用の全額を担ったのである(図145)。



図145 ボンのベートーヴェンの銅像(1845年建立)

<付録>

アントニオ・サリエリ (1750-1825) とウオルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756-1791), それにベートーベン

1823年、老サリエリは、「私がモーツァルトを殺害した」と言い張り、自殺未遂で精神病院に収容される。

虚虚実実織り交ぜて、何でもありの小説、伝記、映画が創作され、一人の歴史上の人物の人間像が創りあげられ、やがて、それが一人歩きして語り継がれる。

それは、ある意味、現代に於るフェイク・ニュースと何ら変わりはない。

その差異は、後者が、より巧妙に創作され、誰でも簡単かつ大量に、瞬時に拡散させる事ができるという事である。

冒頭のサリエリの描写は、最も重要な作品賞も含めた、アカデミー賞8部門、英国アカデミー賞4部門、ゴールデングローブ賞4部門受賞の1984年の話題作、「アマデウス」の一場面である。

イタリア生まれの作曲家・サリエリは、若くしてウィーンのおペラ界で、目覚ましい活躍を開始した（「女文士達, 1770」, 「アルミダ, 1772」）（図146）。



図146 ウィーン宮廷楽長, サリエリ

そして、1774年、24歳の時にウィーン的神聖ローマ帝国皇帝(ハプスブルグ家)のヨーゼフ二世(オーストリア皇帝, ハンガリー国王, ボヘミア国王, 女帝のマリア・テレジアの長男, マリー・アントワネットの兄)の宮廷作曲家兼オペラ指揮者に任ぜられた。

1778年のミラノ・スカラ座の柿落としには、彼の「気に入られたエウロペ」が上演され、パリ・オペラ座で「ダナオスの娘達, 1784」などが称賛されるなど、ウィーン, パリ, ミラノなどヨーロッパ中で、人気・実力を誇った作曲家でもあった。

それ故、彼は1788年、38歳にしてウィーンの宮廷楽長に登りつめ、死の前年の1824年までの長きに亘り、その座に就いたのである。

サリエリは、生涯に43のおペラ他、宗教曲、交響曲などを作曲し、大帝国の宮廷楽長の多忙な任を勤めながら、多くの後進達の教育にも尽力した。

サリエリには、モーツァルトを妬んだり、嫉む理由は皆無であった。

逆にモーツァルトには、サリエリがいるせいで、要職に就けないという嫉妬と恨みは、あっただろう。

サリエリの弟子には、ベートーヴェン、シューベルト、フンメル、ジェスマイヤー、チェルニー、更にはモーツァルトの息子・フランツ・クサヴァー・モーツァルトもいる。

10歳のリストは、1821年、サリエリの晩年、最後の弟子となる事ができた。

サリエリの弟子達は、音楽史に残る錚々たる顔触れであることが分かる。

真面目で教育熱心なサリエリは、その晩年に驚嘆すべきリストの音楽的天分を、目の当たりにし、無償でリストを教育した他、リストの後援者のエステルハージ公に、リストの生活・教育環境の改善の為の、更なる資金援助の請願の詳細な手紙まで書き送っている。

図147は、その手紙の後半部分である(1822

ここでは、ハイドンの3曲のオペラを紹介する。オランダのメジャー・レーベル、フィリップスが、全力を注いだ、ハイドンのオペラ・シリーズの3点で、ドラティの指揮である。ドラティはエリザベス二世より、ナイトに叙任された。

なお、この3点のLPは世界初録音である。図148の、ハイドンの最も重要な、「アルミダ、1783」は、伊語のオペラ・セリアで、4年間で、ヨーロッパで54回上演された(3LP)。



図148 ハイドンの「アルミダ」と歴史的歌手のサイン、ドラティ、1965

歌手も豪華で、ジェシー・ノーマン、ノーマ・バローズ、アンソニー・ロルフ・ジョンソンらのサインがあるのも貴重。

図149は、「月の世界、1777」で、初演後、1959年にカルロ・マリア・ジョリーニ指揮で再演(蘇演)、200年後の1978年に全曲完全世界初録音がなされた(4LP)。

このLPにも、エディット・マチス、ルチア・

ヴァレンティニ・テラーニ、フレデリカ・フォン・スターデなど歴史的歌手達のサインがある。



図149 ハイドンの「月の世界」と歴史的歌手のサイン、ドラティ、1978

図150は、「まことの貞操、1776」で、伊語のドラマ・ジョコーソである。

ハイドンのオペラは全て、最初は伊語の台本で書かれている。内容はモーツァルトの「フィガロの結婚」のような、物語である。

当時の大衆は、芸術性よりも、このようなたわいもない話に、ストレスを発散していたのだろう。

これにもジョシー・ノーマンらのサインがある。このオペラ・シリーズに出演した歌手達は、世界初録音と言うことで、張り切っていたのだろう(3LP)。

なおオペラには、伝統的な歴史劇や神話などを題材にした、「オペラ・セリア、正歌劇」と、18世紀にイタリアで発展した喜劇的な、「オペラ・ブッフア、喜歌劇」

などに分類される事も多い。

なおブッフア (buffa 伊語) は、ふざけた、
という意味である。

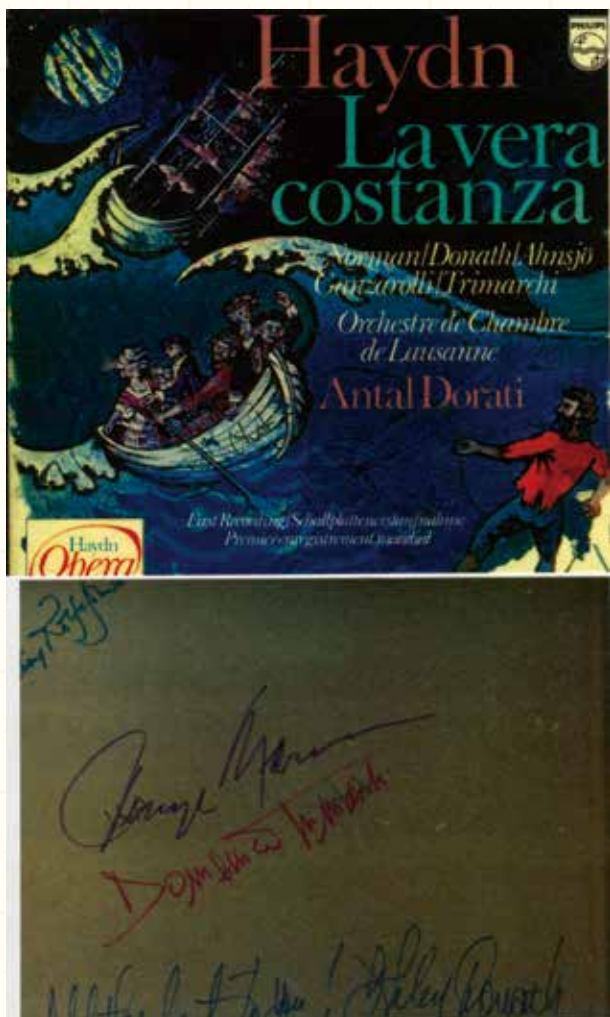


図150 ハイdnの「まことの貞操」と歌手のサイン、
ドラティ、1976

多くの偉大な音楽家を育てあげたサリエリ
に対し、35歳で死去したモーツァルトの晩
年は寂しく、育てた弟子もまた、ほとんどい
なかった。

モーツァルトの後継者と言え、未完の遺
作「レクイエム」を完成させ、当時、名声の
高かった、ジェスマイヤーがいるが、彼はも
ともとサリエリの弟子であり、彼もまた、37
歳の若さで死去した。

結局、若い頃にモーツァルトの内弟子とな
り、ピアノを学び、ベートーヴェンと並ぶ名
ピアニストとなったフンメル唯一人が、後世
に名を残す事となった。

フンメルもまた、作曲はサリエリに学んだ。
皆、音楽の基本を忠実に学んだのである。

フンメルは、1819-1837年を、ワイマール
の宮廷楽長として過ごした。

当然、ワイマール枢密顧問官のゲーテとも
親しく、ワイマールを芸術の都として繁栄さ
せた。

ゲーテ亡き後、衰退したワイマールを芸術
の都として復活させたのが、1848年に宮廷
楽長に就任したリストである。

(付録終わり)

ここで、初期ロマン派のリストからメンデ
ルスゾーン、ショパンと書き続ける予定で
あったが、<特別付録>として、モーツァル
トの生涯を概観してみる。

モーツァルトは、先輩に付いて学ぶ事をせ
ず、従って、ほとんど後進を育てる事の無かつ
た稀な音楽家だったからである。

モーツァルトとショパンの短い人生には、
多くの共通点があるように思える。

<特別付録>モーツァルトの人生



図151 大礼服を着た7歳のモーツァルト
(マリア・テレジアより)

1756年にザルツブルグに生まれたモーツァルトは、その音楽的才能ゆえ、6歳の時から、姉・ナンネルと共に一家で、ミュンヘン、ウィーン、パリ、ロンドンなど、ヨーロッパの演奏旅行に明け暮れた（図151）。

1769年、13歳の時には、父子はインスブルックからアルプスのブレンナー峠を越え、イタリアに入り、ミラノ、ボローニャ、フィレンツ、ローマ……を演奏旅行した。

14歳の時には、ボローニャで高名な音楽家のマルティニ神父から、対位法の指導を受け、短期間でマスターしたと言われる。

ローマでは、教皇クレメンスXIV世から、音楽家として最高の栄誉である「黄金拍車勲章」を授与された。

これは、1756年にグルックが、教皇ベネデットXIV世から授与された「ラテラノ騎士勲章」より格上のものであった。

更にボローニャでは、アカデミア・フィラルモニカから、正規会員として受け入れられたが、これらは、モーツァルト少年がイタリアでは、一流の音楽家と見做された事を意味している。

ただ、2度のイタリア旅行にもかかわらず、モーツァルトが、父の希望のミラノ大公の宮廷音楽家の職に就く事はできなかった。

最終的にモーツァルトがザルツブルグに戻ったのは、1773年、17歳の時であった。

この長年の大演奏旅行は、彼の音楽人生には、限りない糧となったが、彼の人間性、精神的発育に関しては、負に働いたと思われる。

ただ、1772年から、モーツァルトは年俵150グルデンの宮廷音楽家となっていた。

このザルツブルグ時代の4年半の間に、多数の大曲を含む、120余曲が作曲された。

演奏旅行での見聞、知識も作曲に生かされたのである。

然し、ザルツブルグ時代は、モーツァルト

には嫌な時代であった。

1772年に新任したコロラド（コロレード）大司教と反りが合わず、対立していたからである。

1777年、遂に提出していた辞表が受理されて、21歳のモーツァルトは、母アンナ・マリアと2人で、新天地（新しい就職先）を求めて、パリに向かう事となった（9月）。

途中のアウグスブルグでは、叔父の娘・ベーズレにであうし、マンハイムでは、アイロシヤとも出合った（詳細略）。

出発から10ヶ月後の1778年7月に、旅の疲れや心労から、最愛の母がパリで死去した。

パリでのモーツァルトは、かつて一世を風靡した「神童」ではなく、単なる一人の青年音楽家にすぎなかった。

神童の栄光など、とっくの昔に消え去っていたのである。

パリなどでの就職も叶わず、父親の切望もあり、いやいやながら、大司教に復職の嘆願書を提出し、復職が許可されたのは、1779年の事であった。

それでも大司教により、年俵は3倍の450グルデンに上がった。大司教も彼の実力を認めていたのだろう。

1780年に朗報が入った。ミュンヘンのバイエルン選帝候からの、謝肉祭のためのオペラ依頼がきたのである。

この依頼に感激したモーツァルトが、持てる若い力の全てを注ぎ込んで作曲したのが、伊語によるオペラ・セリアの大作、「イドメネオ」である。

万全を期して、上演の約3ヶ月前にミュンヘンを訪れた彼は、3回のオーケストラの試演など、入念な準備に努めた。

81年1月27日、モーツァルトの25歳の誕生日には、ゲネプロ（General Probe、総練習）が行われた。

1月29日、ミュンヘンの宮廷歌劇場で、

父親、姉のナンネルも見守る中、このオペラが上演された。モーツァルトが、このオペラにミュンヘンでの就職を賭けていた事は、まちがいない。

然し、このオペラが、観客の心を掴む事はできなかった。

その後、この曲が再演されたのは、わずか2回のみであった。

この大作は、トロヤ戦争後のクレタ王・イドメネオとその王子・イダマンテ、それにトロヤ王の娘・イリア、それにアルゴス王・アガメムノンの娘・エレクトラのからむ歴史的叙事詩であり、台本も申し分ない。

もしこのオペラが成功していたら、モーツァルトのその後のオペラの創作活動も人生も、大きく変わっていただろう。

なぜ、このオペラが成功しなかったのかは、誰も今日まで、その理由を述べていないので、分からない。

私の見解としては、イリアとエレクトラの2人のソプラノを有し、アリアとレチタティーヴォの続く、このオペラでは、豪快なヘルデンテノールと、後のマリア・マリブラン、ジュディッタ・パスタ、あるいは、現代のマリア・カラスのような、劇的表現力を持つ、ソプラノ・ドラマティコの存在は不可欠であるが、当時のミュンヘンですら、そのような歌手が、存在しなかったのだろう、と言う他ない。

あきらめきれないモーツァルトは、ウィーンでの再演を目指し、内容の改変を図るも、上演はかなわなかった。

そして、最終的に、セリアからオペラ・ブッフアに大転換を図る事になるのである。

それは、モーツァルトにとっては、大正解であったかもしれない。結果的には……。

形骸化した、オペラ・セリアを、「オペラの改革」で頂点に導いたのがグルックであり、オペラ・セリアは、その後、19世紀の独のウェーバーによる「ロマンチック・

オペラ、ロマン派オペラ」やスポルティニ、ケルビーニ、マイヤベーヤなどの「仏のグランド・オペラ」、更には、ワーグナーの「楽劇」などに発展していった、と言うのが、私の説である（文献を読んでも、細かすぎて大筋が見えてこない）。

ただ、カストラートの消滅もオペラ・セリアの衰退を招いた事にまちがいない。

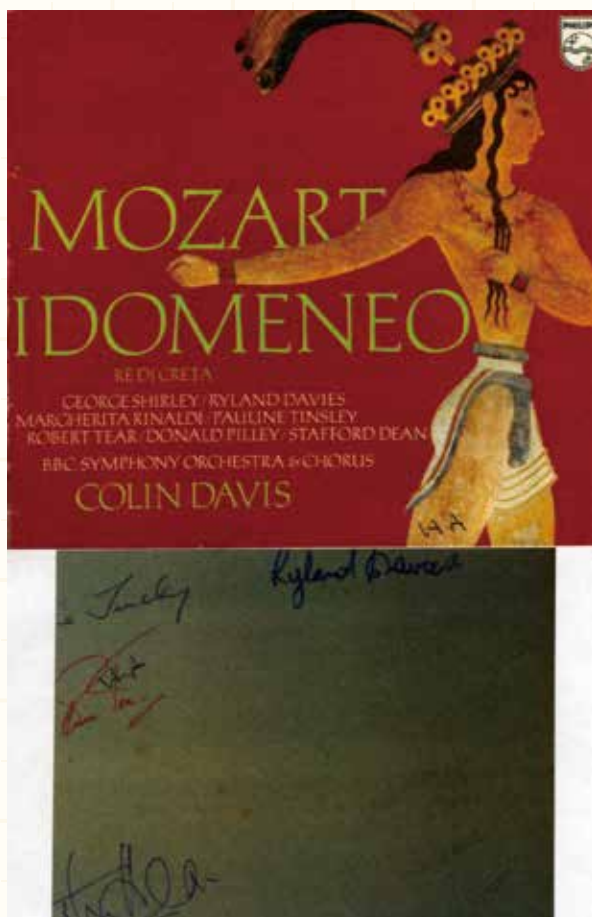


図152 モーツァルトの「イドメネオ」と歌手のサイン、デイヴィス、1969

図152は、コーリン・デイヴィス指揮、1968年の「イドメネオ」である。

歌手達のサイン入りで貴重である。

ただ、ミュンヘンの就職は、叶わなかった。ザルツブルグより居心地のよいミュンヘンに滞在中のモーツァルトに、この1881年に、ウィーン滞在中のコロラド大司教の呼び出しがかかる。

そして最終的に、大司教と喧嘩となり、ザルツブルグと縁が切れ、以後、モーツァルトは、死ぬまでウィーンに定住するので

ある。

モーツァルトの「ウィーン時代」である。

1782年には、コンスタンツェと結婚する事もできた。

当初は、ピアノのレッスン、貴族の館での演奏会、楽譜出版、オペラの上演（皇帝・ヨーゼフ二世の依頼による「後宮からの逃走」1881）など）の他、多くの作曲依頼で、相当な収入を得ていたはずである。

何しろ、わずか35年の生涯で、約600曲もの大作等を書き続けてきたのだから。

ただモーツァルトは、その類稀な音楽的才能とは裏腹に、教養が無く軽薄で、下品で、才能を鼻に掛け他人の作品をけなすなど、社会性が欠如していた。

伝記が伝えるように、金銭感覚が無く浪費癖もあったのだろうか？

才能故に幼少時から、大人達にちやほや持てはやされ、世間知らずに育った彼は、いつの世でもある事だが、時代の、父親の犠牲者だったのかもしれない。

1786年の伊のオペラ・ブッフア、「フィガロの結婚」のウィーンでの初演後の、ボヘミアのプラハの同曲の上演では、圧倒的評判を得、更に、1787年のプラハでの伊のオペラ・ブッフア「ドン・ジョバンニ」の初演でも大成功を収めた。

プラハに招待されたモーツァルトは、熱狂的な大歓迎を受けた。

更にこの年、偉大なオペラ作家・グルックの死去に伴い、モーツァルトは、その後任として、皇帝・ヨーゼフ二世から宮廷作曲家に任命されたのである。

然し年俸は、グルックの2,000グルデン（フローリン）の半以下の800グルデンであり、不満が残った。

然し、この頃が、モーツァルトの人気の頂点であり、彼の人生は、下り坂を転がり始めたのである。

サリエリが、ウィーンの宮廷楽長に就任した1788年、同宮廷作曲家のモーツァルトの「ドン・ジョバンニ」のウィーン初演の評判は芳しくなかった。

図153は、カール・ベーム指揮の「フィガロ」、1968年のドイチェ・グラモフォンの歴史的名演である。フィッシャー・ディスカウ、ヤノヴィッツ、ヘルマン・プライ（サイン有）など、超豪華歌手陣である。



図153 モーツァルトの「フィガロの結婚」の名盤、ベーム、1968

図154は、その時のコスチュームである。「初夜権」なるものまで飛び出し、貴族を擲揄したようなオペラは、モーツァルトにとっては、大のお好みで、プラハのような地方都市では、庶民のストレス解消として、大喝采を浴びたのは、当然だろう。



図154 「フィガロの結婚」のコスチューム

総じて、モーツァルトの作品は、オペラのアリアの一部を除き、演奏が比較的容易で、曲想は明解で明るく、親しみ易く、誰の耳にもなじみ、心に残る。

オペラ・セリアと異なり、オペラ・ブッフアは、舞台装置や衣装代、出演者数も少なく、上演費用が低く抑えられる。

更に曲種が多彩で、どのような楽器（群）にも対応できるという点で、比類の無い、長所だらけの万能作家である。

然し誰もが、万能の作曲家の傑作、名作ばかりを好むと言うわけではない。

ヒエラルキーの頂点であり、グルックのオペラにも親しんだウィーンの観客に、モーツァルトが両手を挙げて受け入れられなかった理由もあるだろう。

前記のように1788年以降、モーツァルトの人気は衰え、なぜか、経済状態は悪化の一途をたどった。

1790年には、イタリアのオペラ・ブッフア、「コシ・ファン・トゥッテ、女はみんなこうしたもの」が、ウィーンで初演され、10回上演されたが、この年に、頼みの綱の皇帝・ヨーゼフⅡ世が死去すると、困窮の度を増した。その事は、多くのモーツァルトの手紙に生々しく書き残されている。

残念でならない。このような音楽家の地位の低さによる経済状況は、リストがその地位向上の声を上げるまで続くのである。

1791年9月には、「魔笛」がウィーンで初演された。

今日、モーツァルトの傑作と言われるオペラが、目白押しに上演されたが、モーツァルトの経済状態が改善する事は無かった。

図155は、クレンペラー指揮、1964年の「魔笛」の稀に見る超豪華歌手陣である（主役級のサインあり）。何しろ侍女Ⅰが、エリザベト・シュワルツコップ、侍女Ⅱが、クリスタ・ルードヴィヒなど考えられないキャスティングで

ある。夜の女王・ポップ、パミーナ・ヤノヴィッツである。

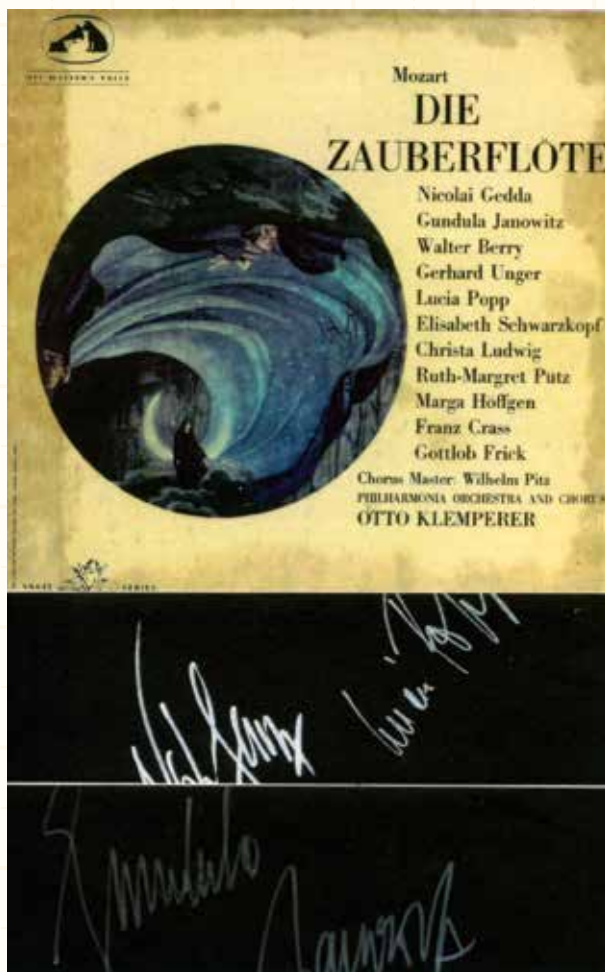


図155 モーツァルトの「魔笛」の名盤
超豪華メンバー、クレンペラー、1964

「魔笛」初演後、追われるように「レクイエム」の作曲を開始したが、わずか3ヶ月後の12月5日、モーツァルトは尿毒症性昏睡に陥り、35歳の生涯を閉じた。

死後、駆け付けた音楽愛好家貴族(モーツァルトに、バッハやヘンデルの音楽を知らしめた)ヴァン・スヴィーデン男爵が、葬儀、埋葬費などを出し、執り行った。

聖マルクス墓地への葬列に加わったのは、ごく少人数で、妻・コンスタンツェ自身はショックで、葬儀にも出席しなかった（この年コンスタンツェは6番目の子を産んだ。フランツ・クサヴァである。彼はモーツァルトⅡ世を名乗った）。

柩は誰一人の立合人にも見守られず埋葬さ

れた。十字架も立てられず、どこに埋葬されたかすら、現在まで不明のままである。

コンスタンツェが墓地を訪れたのは、死後17年後の事であり、翌年の1809年に、デンマークの外交官ニッセンと再婚し、1842年に、モーツァルトの生地・ザルツブルグで死去した。

モーツァルトはバッハに関わる多くの曲を書き（省略）、若い頃には、サンエリの歌劇「ヴェネチアの定期市」の aria による6つの変奏曲（K.180）を書いている。

<付録> グルック、モーツァルトとマリア・カラス



図156 モーツァルト「フィガロの結婚」(19世紀絵画) 伯爵の登場でスザンナの机子の背後に隠れるケルビーノ、モーツァルトの傑作オペラ

前記の図154は、モーツァルトの「フィガロ」の衣装である。図156は「フィガロ」の19世紀の絵画である。

この場面は、伯爵の登場で、スザンナの机子の背後に隠れるケルビーノである。

確かに、これを見て観客は楽しいだろう。

モーツァルトの傑作だろう。

ウィーンの宮廷作曲家、グルックはどうだろう（前者の年俸800グルデン、後者の年俸2,000グルデン、その差にモーツァルトは不

平をもらしたに違いない。自分の方が、ずっと才能があるのに……と）。

でも、前記のハイドンの「まことの貞操」(図150)に比し、何か音楽的に進歩があっただろうか？

グルックは、従来の伊オペラ・ブッフアを捨て、ドラマと格調高い音楽表現の一致を重視したオペラを目指した「オペラ改革」を推進した、先進的音楽家であった。

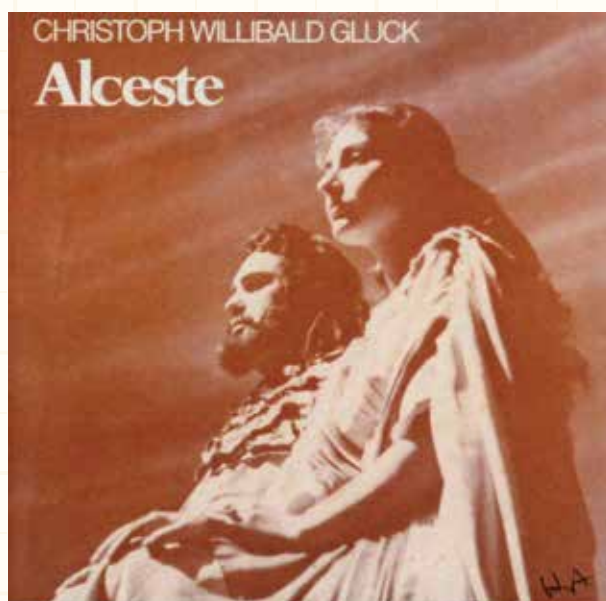


図157 グルック「アルチェスタ」、グルックの傑作オペラ マリア・カラス、ジョリーニ指揮、スカラ座、1954

彼は、「オルフィオとエウリディチェ」、「アルチェスタ」、「トーリードのイフィジェニー」の代表的3作品を遺した。

前2曲は、ギリシャ神話から、3曲目は、エウリピデスの悲劇からの物語である。

偉大な歌手、マリア・カラスは、後2曲の全曲録音を遺した（モーツァルトの曲の全曲録音は残さなかった。当然であろう）。

図157は、マリア・カラス、ジュリーニ指揮、ミラノ・スカラ座、1954の「アルチェスタ」である。



図158 グルック「トーリードのイフィジェニー」
マリア・カラス, サンゾーニョ指揮, スカラ座, 1957

図158は、マリア・カラス、サンゾーニョ指揮、ミラノ・スカラ座、1957の「トーリードのイフィジェニー」である。

豪華な部屋の中で、下品で面白く、おかしく、そして楽しく笑えるモーツァルトと、荘厳な神殿で、切切と朗朗と歌いあげるグルック。どちらが感動的であろうか？

これらのモーツァルトとグルックのオペラを比べると、私は「イドメネオ」が、ウィーンで上演されなかった事が悔やまれてならない。

（おまけ）オペラ・セリアと女性歌手

オペラの大舞台で歌って演じる女性歌手は、観客を魅了する圧倒的存在感（オーラ）と歌唱力、演技力、容姿が要求される。

レナータ・デバルディは、185cm。

オペラ・ブッファに比し、衣装も豪華、出演者数も膨大で、舞台も大神殿等大掛かりで、公演には莫大な資金を要する。大劇場でしか上演できないし、失敗は許されない（図159）。



図159 圧倒的存在のヒロイン
左:レナータ・デバルディ
右:マリア・カラス

もしモーツァルトに、あと2-3曲、オペラ・セリアを書く恵まれた環境があったら、モーツァルトは、どんな曲を書いただろう、と想像すると、実情は残念である。

無い物ねだりか！

（つづく）